

大学生における「学校に通い続ける理由」の構造 ーテキストマイニングを用いた検討ー

The Structure of “the reasons of keeping attendance at school” among University Students: examination through Text mining techniques

加藤 陽子
Akiko KATO

要 旨

大学全入時代を迎え、学生の質の多様化が進むにつれて、対応の難しい学生や不適応学生（学生生活に何らかの問題を抱えているもの）の増加が憂慮されている。学生の学校不適応に対し、これまで研究では、不適応の原因や発生のプロセス、個別の事後援助などから提案を行うものが主流であった（e.g., 下山, 1995；福田, 2000；白石, 2005；小塩・願興寺・桐山, 2007；外ノ池, 2007）。しかし、こうした研究は、事後対応になりやすく問題解決が困難になりがちであり、大学独自のニーズに对应しているとはいえない。

そこで、本研究では既に不適応になった学生ではなく、現在も継続的に学校に通い続けている学生に注目し、「学校に通い続ける理由」をテキストマイニングの手法を用いて検討した。調査は、首都圏の大学に通う大学生473名（男性145名、女性328名；平均年齢19.33歳， $SD = 1.05$ ）を対象に行われ、「現在大学に通い続けられている理由」に関する自由記述回答を求めた。

テキストマイニングの結果、「学校に通い続ける理由」として87構成要素が得られた。全構成要素数を対象に行った対応分析から得られた成分スコアをもとにクラスター分析を行った結果、「就職への手段」「他者による支え」などの10クラスターが得られた。また布置図から、「学校に通い続ける理由」はそれぞれ対極的な意味を持つ2つの軸からなり、個人は登校を維持する理由を複数持つ可能性があることなどが明らかとなった。さらに、学年、性別、学校と「学校に通い続ける理由」との関連を検討した結果、「学校に通い続ける理由」には性差が見ら

十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：大学生，学校不適応，学生相談，登校行動持続要因，テキストマイニング

れ、女性は対人関係や情緒的な要素を重視したポジティブな理由を取り上げ、男性は環境や手段的な要素を重視したネガティブな理由を取り上げやすいことが示唆された。

問題と目的

学校基本調査（文部科学省，2009）によれば、昨年度の大学（短期大学を含む）への進学率は56.2%となり、過去最高を記録した。大学進学率の上昇にともなって、大学には多様な背景やニーズを持つ学生が増えてきている。こうした学生の増加が問題とされるのは、彼らが学生生活に何らかの問題を抱える、いわゆる「学校不適応」の状態に陥る可能性をはらんでいるためであろう。実際、全国の学生相談件数は年々増加しており、その内容も複雑になる傾向にあることが指摘されている（大島，2004；日本学生相談学会特別委員会，2007）。また白石（2005）は、抑うつ傾向を示す学生の多さを踏まえて、治療対象とはいえないまでも、何らかの困難を抱えながら学生生活を送っているものも少なくないと述べている。

大学における学生支援にはさまざまな形があるが、中でもカウンセリングを中心とした学生に対する相談・援助活動を行う「学生相談」は、学生支援の基盤の1つとして機能することが期待されている（日本学生支援機構学生相談部，2007）。実際には、このような指摘がなされる以前から既に多くの大学でさまざまな取り組みが行われ、支援活動がなされてきた。にもかかわらず、長期の学校不適応や不登校、休学、退学など進路変更を行う学生数は、増加の一途をたどっている（内田，2009）。

そもそも、大学における学校不適応は、義務教育のそれとは異なる困難さがある。これまで、大学教育においては学生自身の自律性・自発性が尊重されてきたため、欠席や遅刻などから不適応学生の早期発見を試みたり、教員がそれらを把握し指導する習慣がない。また、クラスやHR制度が無い場合、学生間のつながりも希薄になりやすく、大学生活からの離脱も起こりやすい。こうした理由から、大学教育では不適応学生への支援はどうしても事後対応になりやすく、不登校や引きこもりといった問題は長期化し、対応はより困難なものになりがちである。そのため、大学における不適応学生への対応は、義務教育以上に、「不適応学生を生じさせないための〈予防的なアプローチ〉」が重要になってくるといえるだろう。学生が過去の学校生活における不適応の有無にかかわらず、大学において適応できるようにするためにも、学生の力を伸ばし、不適応を未然に防ぐ支援は欠かせない。

しかし、これまで学生の不適応に関する研究の多くは、スチューデント・アパシーや対人恐怖に代表されるような臨床心理学的援助を必要とする範疇の問題として、事後の援助方法や不適応の原因や発生のプロセス、個別の事後援助などから提案を行うものが主流であった（e.g., 下山，1995；福田，2000；白石，2005；小塩・願興寺・桐山，2007；外ノ池，2007）。こうした研究は、事後対応になりやすく問題解決が困難になりがちであり、大学独自のニーズに応えているとはいいがたい。また、最近では不適応予防の観点から大学生の初期適応に関する研究や不適応予防のための認知変容プログラムの検討などが行われているものの（e.g., 半澤2009；及川・坂本，2008），これらの研究は「なぜ不適応になるのか」といった問いからスタートしており、「なぜ不適応にならなかったのか」という単純な疑問に答えていない。ほとんどの学生が学生生活に適応しているにもかかわらず、適応的に過ごしている学生の資源を活用すると

いう観点から行われた研究は散見されない。

ところで、大学生のライフスタイルは多様であり、多くの学生は大学生生活のほかにもアルバイトや公務員講座などのダブルスクール、ショッピング、恋人とのデートなど、複数の場所に身をおきながら生活している。したがって、学校に通うことが、すなわち学生の学校適応の指標のすべてであるわけではない。しかし、大学が大衆化するにつれ、かつて一般的であった“とりあえず試験だけ受ければ単位が得られる”、“大学に通うか否かは本人の意思”といった考えは成立しなくなり、近年では、学生をはじめ保護者や教員の多くも「できる限り大学には通学するものだ」という考えを持っているように感じる。さらに、不登校や社会的引きこもりなど、大学に行きたくても行けない学生が大学から離脱することによって生じる問題を勘案すると、「ひとまず大学に来ること」によって、支援の枠組みに入りやすい状況を作っておくことは、学生支援の重要な一側面だと考えられる。

以上のことから、本研究では、既に不適応になった学生ではなく継続的に学校に通い続けられる学生に注目し、「学校に通い続けている理由（以下、登校行動持続要因）」をテキストマイニングという手法を用いて探索的に抽出し、その構造を検討することを目的とする。

方 法

調査対象者 調査協力者は、埼玉県内にある私立4年制大学（共学）で人間科学系を専攻する317名および私立4年制女子大学で心理学を専攻する学生の計189名であった。これらの内、回答漏れのなかった473名（平均年齢19.33；SD = 1.05）を分析対象とした。詳細は Table 1 に示す。なお、調査対象者が所属する学部学科はともに人文系で、卒業生の7割が民間企業に就職している。

Table 1 調査対象者の内訳

内訳	大 学		性 別		学 年			
	A大学	B大学	男性	女性	1年生	2年生	3年生	4年生
人数	286	187	145	328	144	189	67	72

調査内容 性別・年齢を尋ねるフェイスシートに加えて、「不登校にならずに、いま大学に通い続けている理由」について自由記述形式で回答を求めた。

手 続 き 大学に行き続ける理由に関する質問紙が2009年5月～6月にかけて大学の授業時間に配布、実施された。南・山口（1991）は、環境移行への適応の指標になる対人ネットワークの再構成は5月までにはほぼ終了し、それ以降は状態が安定すると指摘している。そのため、本研究においては、多くの学生の環境移行が安定したと考えられる5月以降に調査を行った。なお、質問紙の回収は、理由を想起することの困難さを考慮し、1週間後の同じ講義時間内に回収することとした。調査実施にあたっては、事前に担当者に調査実施の承認を得たのち、調査協力者に対して本研究の趣旨について口頭および紙面にて説明した。また、得られたデータ

は個別に解析することなく統計的な処理を行うこと、質問紙は個人情報保護のため使用後は適正に処分されることなど、研究倫理に関する説明を行った。

結 果

「学校に通い続ける理由」の構造 はじめに、大学生が「現在大学に通い続けている理由」、すなわち「登校行動を持続している理由（以下、登校行動持続要因）」をどのようにとらえているのかということについて検討する。

登校行動持続要因に関する自由記述回答について、テキスト型データ解析ソフトウェア「Word Miner®」（日本電子計算株式会社）を用いて、回答文章の分かち書き処理、多次元データ解析を行った。なお、分かち書き処理はHapiness/ AiBASE（株式会社平和情報センター）によって行われた。

まず、テキスト型データをリファインするため分かち書きを行った。その結果、構成要素数は2336、句読点・助詞・特殊記号を除去後の要素数は707であった。さらに、解析対象の構成要素を整理し分析見通しを改善するため、同種の語を1つの語に置換し、不要な語を削除するための置換辞書と削除辞書を作成し、データをリファインした。なお、データをリファインする作業にあたっては、学校不適応およびテキストマイニングに詳しい研究者と筆者を含めた評定者3名で整理を行った。

得られた構成要素のうち、出現頻度の少ない要素は一般性が低いと判断し、頻度が6以上（閾値＝6）を採用した結果、構成要素数は87となった。構成要素において、もっとも頻度が高かったのは「友達がいる」で199回、100回以上出現した構成要素は「友達がいる」「家族などからの金銭的サポート」「興味があることを学びたい」であった。閾値6以上の構成要素をTable 2に示す。

次に、全87の構成要素を対象にサンプル×構成要素の対応分析を行った。さらに、対応分析から得られた成分スコアをもとにクラスター分析を行った。その結果、10つのクラスターに分類された（Table 3）。

クラスター1は、「いい企業に就職するため」や「学歴の取得」「就職するため」を理由とする項目から構成されており、大学に通い続ける理由として就職につながることを強く意識していることから、「就職への手段」と名付けた。クラスター2は、「これまでの努力を無駄にしたくない」「一人でいるとさびしい」などからなり、どちらかという消費的、あるいは義務的な理由から大学に通い続けていることから「消費的理由・努力義務」と名付けた。クラスター3は、大学に通い続ける理由として「親のしつけ」「名門大学だから」という親の教育方針や期待などと関連が深い要素から構成されていることから「親の教育方針」とした。クラスター4は「視野拡張」「自己変革・自分成長」などからなり、自分が一回り大きくなることに役立つから大学に行くのだと答えていることから「自分への期待」とした。クラスター5は「サークルがある」「サークルの友人関係」「色々なことを吸収したい」といった大学に付随する様々な事柄を楽しみたいと考えている要素からなる一方で、「学費を無駄にしたくない」「受験の苦労を無駄にしたくない」などのこれまでの努力や金銭を無駄にしたくないといった理由からならなかったことから、「無駄なく楽しみたい気持ち」と名付けた。クラスター6は、「行かな

Table 2 「大学に通う理由」の構成要素と度数

構成要素	度数	構成要素	度数	構成要素	度数
1 友達がいる	199	31 受験の苦勞を無駄にはしたくないから	25	61 今を楽しみたい	11
2 家族などからの金銭的サポート	119	32 サークル関係良好	24	62 自由だから	11
3 興味があることを学びたい	110	33 社会に出る準備	24	63 親に申し訳ない	11
4 目標達成のため	82	34 負けたくない・後れを取りたくない	22	64 世間体	11
5 親・家族の応援・サポート	67	35 友達関係の構築・発展・深化	21	65 先生の応援・サポート	10
6 講義が興味深い	65	36 友達の応援・サポート	20	66 息抜きできる	10
7 資格取得	65	37 新しい知識獲得	19	67 名門大学だから	10
8 親孝行・恩返し	59	38 人間関係悪くない	19	68 頑張っている人の影響	9
9 自己変革・自己成長・自己改善	58	39 部活が楽しい	19	69 人に迷惑をかけたくない	9
10 人間関係拡張	58	40 家にいても退屈	18	70 生活リズムの維持	9
11 将来のため	50	41 将来探し	18	71 責任感	9
12 夢実現のため	50	42 知識の増強・拡張・深化	18	72 憧れの大学	9
13 就職のため	49	43 念願の大学	18	73 自己責任	8
14 サークルがある	44	44 やりたいことがある	17	74 大学の環境が快適	8
15 自己選択・自己決定	44	45 講義に出るため	17	75 大学生活を充実させたい	8
16 学費を無駄にしたくない	42	46 親・家族に迷惑をかけたくない	17	76 役割・使命感・責任感	8
17 行くのが当たり前	40	47 仲間がいる	17	77 これまでの努力を無駄にしたくない	7
18 色々なことを吸収したい	40	48 一人だと寂しい	15	78 親のしつけ	7
19 周囲の人たちのサポート	38	49 恩師のサポート	14	79 友達関係不安	7
20 義務感	37	50 行くことが習慣	14	80 恋人のサポート	7
21 単位取得	37	51 先輩関係良好	14	81 せっかく入学できたのにもったいない	6
22 大学生活が楽しい	33	52 勉強するため	14	82 罪悪感	6
23 親・家族の期待に応えたい	32	53 いい企業に就職するため	13	83 社会貢献	6
24 友達関係良好	31	54 視野の拡張	13	84 奨学金のため	6
25 学歴取得	29	55 地元(高校以前)の友達	13	85 親・家族に申し訳ない	6
26 卒業するため	29	56 勉強が楽しい	13	86 大学で安心できる	6
27 行かないことへの不安	28	57 居場所がある	12	87 反面教師	6
28 自分探し	27	58 親を裏切りたくない	12		
29 親のため	26	59 楽しいことがある	11		
30 自分のため	25	60 行きたくない理由がない	11		

いことへの不安」「友人関係不安」からなり、これらは大学に行かないことによって自分の不利益が生じるのではないかという不安を示していることから、「不安感」とした。クラスター7は、「大学で安心できる」「大学の環境が快適」といった要素からなり、大学に通う理由として安心できるあるいは快適に感じることを示していたことから「居心地がよい・安心」と名付けた。クラスター8は、「やりたいことがある」「自己責任」「人に迷惑をかけたくない」などからなり、自身の役割や責任感などを強く意識した回答となっていることから「役割を果たそうとする気持ち」と名付けた。クラスター9は、「家族からの金銭的サポート」「罪悪感」などの頑張らなくてはという要素からなる一方で、「自分のため」「自己決定」という自ら選び取った選択だからこそ頑張りという要素からなっていた。そこで、「がんばるため」とした。最後に、クラスター10は「恩師のサポート」「周囲の人たちのサポート」などからなり、他者による様々なサポートのおかげで大学に通い続けていると感じていることから「他者による支え」とした。

なお、「登校行動持続要因」の構造を知るために、説明率の高い成分1を横軸、成分2を縦軸としてそれぞれのクラスターおよび構成要素を配置したものをFigure1に示す。

成分1(横軸)は、「視野の拡張」「名門大学だから」「自分探し」など道具的で手段的な要素を含む理由の成分が強く、反対方向に「恋人のサポート」や「先生の応援・サポート」「がんばっている人の影響」など情緒的な理由の成分がみられたことから、「手段的な理由」-

Table 3 「大学に通う理由」のクラスターごとの構成要素

クラスター	クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5	クラスター6	クラスター7	クラスター8	クラスター9	クラスター10
	就職への手段	消極的理由・努力義務	親の教育方針	自分への期待	無駄なく楽しみたい	不安感	居心地がよい・安心	役割を果たそうとする気持ち	がんばるため	他者による支え
サイズ	5	5	2	5	22	2	2	8	27	9
構成要素	いい企業に就職するため 学歴取得 自分探し 就職のため 人間関係拡張	これまでの努力を無駄にしたくない 一人できると寂しい 社会に出る準備 人間関係悪くない 友達関係の構築・発展・深化	親のしつけ 名門大学だから	視野の拡張 自己変革・自己成長・自己改善 将来探し 生活リズムの維持 憧れの大学	サークルがある サークル関係良好 家においても退屈 学費を無駄にしたくない 興味があることを学びたい 今を楽しみたい 資格取得 自由だから 社会貢献 受験の苦勞を無駄にはしたくないから 奨学金のため 将来のため 色々なことを吸収したい 親・家族に申し訳ない 親孝行・恩返し 先輩関係良好 大学生活が楽しい 大学生活を充実させたい 知識の増強・拡張・深化 念願の大学 勉強が楽しい 友達関係良好	行かないことへの不安 友達関係不安	大学で安心できる 大学の環境が快適	やりたいことがある 居場所がある 講義に出るため 自己責任 新しい知識獲得 人に迷惑をかけたくない 責任感 役割・使命感 責任感	せつかく入学できたのにもったいない 家族などからの金銭的サポート 楽しいことがある 頑張っている人の影響 義務感 行きたくない理由がない 行くことが習慣 行くのが当たり前 講義が興味深い 罪悪感 自己選択・自己決定 自分のため 親・家族に迷惑をかけたくない 親・家族の期待に応えたい 親に申し訳ない 親のため 親を裏切りたくない 世間体 息抜きできる 卒業するため 単位取得 反面教師 負けたくない・後れを取りたくない 部活が楽しい 勉強するため 夢実現のため 友達がいる	恩師のサポート 周囲の人たちのサポート 親・家族の応援・サポート 先生の応援・サポート 地元(高校以前)の友達 仲間がいる 目標達成のため 友達の応援・サポート 恋人のサポート

「情緒的な理由」を表すと考えられた。また、成分2（縦軸）は、「友人関係不安」「行かないことへの不安」「罪悪感」など不安で消極的な理由の成分が強く、反対方向に「大学で安心できる」「先生の応援・サポート」「勉強が楽しい」などと安心・積極的な理由と関連が強かったことから、「ネガティブな理由」－「ポジティブな理由」を表すと考えられた。なお、原点に近い構成要素は度数が多く、複合的な理由であり、どの学生にも共通している理由だと思われる。

「登校行動持続要因」と学年・性別・所属大学の関連 次に、「登校行動持続要因」の構造をより詳細に検討するため、学年、性別、所属大学と登校行動持続要因にどのような関連がみられるかを検討した。

はじめに、サンプル×構成要素のクロス表に学年を変数として追加し、クラスターの配置図に加えて配置した (Figure 2)。その結果、1年生はポジティブで手段的な理由のクラスター



Figure 1. 「大学に通う理由」構成要素の布置図

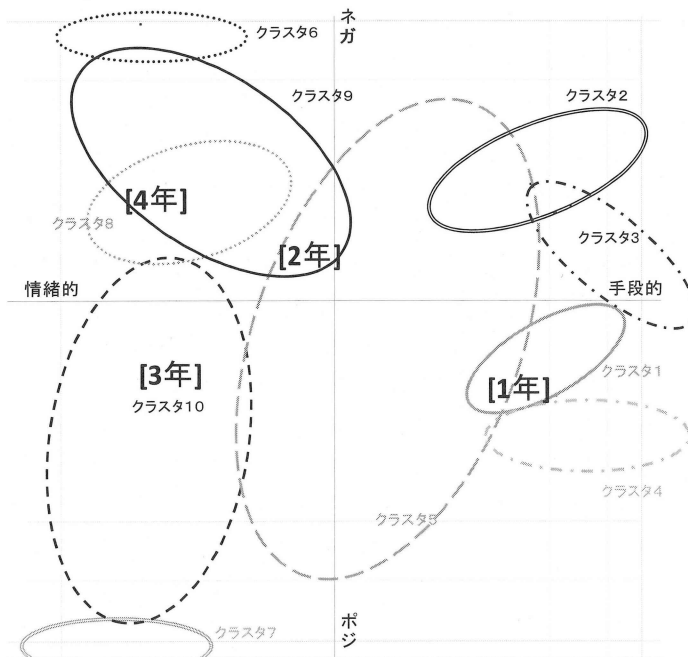


Figure 2. 「大学に通う理由」構成要素と学年の布置図

が多い第4象限に位置し、2年生は中心に近くオーソドックスな理由が多い場所に配置された。さらに、3年生は周囲のサポートを強く感じている第3象限に位置し、4年生はがんばろう、役割を果たそうとする第2象限に配置された。

同様に、サンプル×構成要素のクロス表に性別を変数として追加し、クラスターの配置図に加えて配置した (Figure 3)。その結果、男性は努力義務や手段的な理由を示すクラスター2やクラスター3に近い第1象限に、女性は周囲のサポートを強く感じているクラスター10に近い第3象限に配置された。

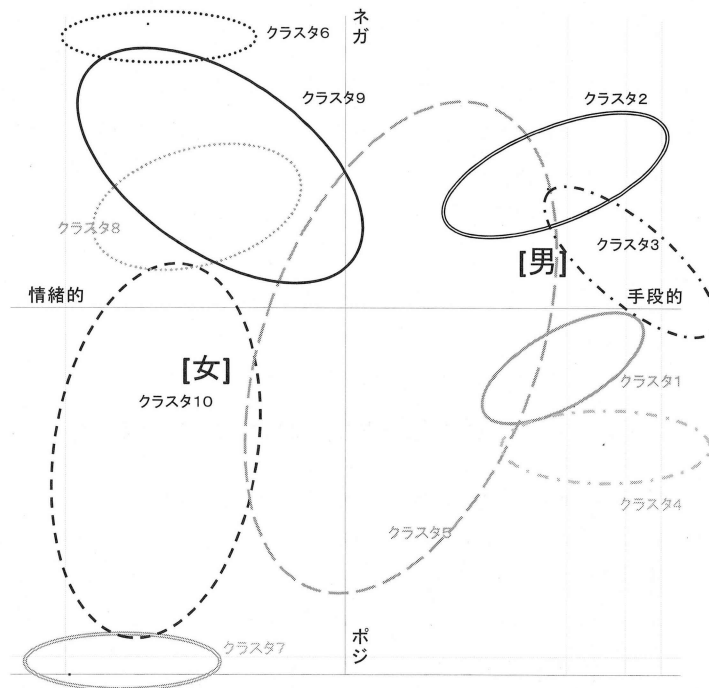


Figure 3. 「大学に通う理由」構成要素と性別の布置図

ところで、大学に入学する目的は、大学の持つ特徴や学生の志望動機によって大きく異なるだろう。こうした違いは、登校行動持続要因にも影響を及ぼすと考えられる。つまり、登校行動持続要因には、多くの大学生に共通する理由があるものの、理由の選択の仕方は大学によって異なる可能性があるのではないかと考えた。本研究では、首都圏に位置する異なる2つ大学においてデータを集めている。そこで、所属する大学によって登校行動持続要因が異なるかどうかを検討するため、サンプル×構成要素のクロス表に所属大学を変数として追加し、クラスターの配置図に加えて配置した (Figure 4)。その結果、A大学(私立4年制大学、大規模校、上位校)は、布置図の右側である「手段的な理由」方向に位置し、B大学(私立4年制女子大学、小規模校、中位校)は、布置図の左側である「情緒的な理由」方向に布置された。

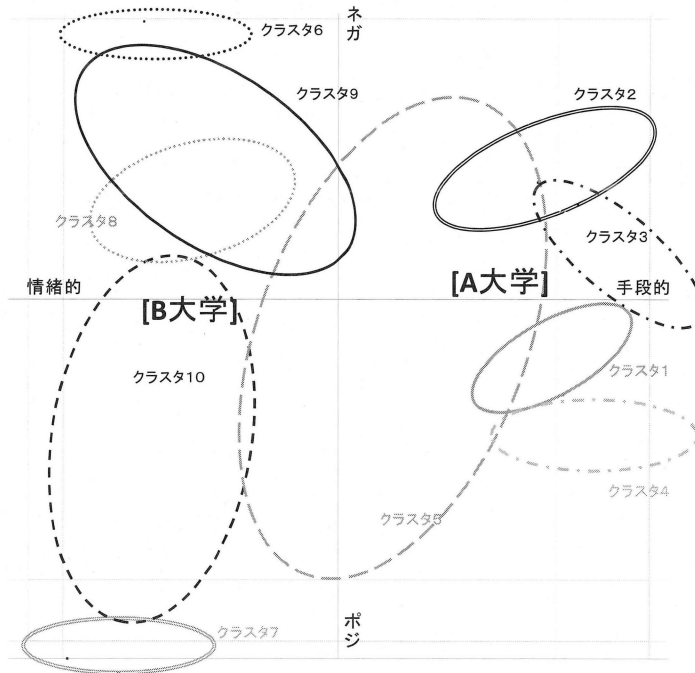


Figure 4. 「大学に通う理由」構成要素と所属大学の布置図

考 察

「学校に通い続ける理由」の構造 本研究では、テキストマイニングという手法を用いて、大学生の「登校行動持続要因」の構造について自由記述回答を探索的に分析することが目的であった。

Word Miner® を用いた多次元データ解析分析の結果、大学生における「登校行動持続要因」の特徴として、次の6点が明らかとなった。①周囲との関係を考慮した理由（特に、恩返しや感謝の気持ちなど）が多くみられた、②自己の可能性の拡大を意識した理由が多くみられた、③社会に出ることを意識した理由が多くみられた、④金銭的な理由が多くみられた、⑤積極的・意欲的理由と消極的・葛藤的理由の両方が見られた、⑥多くの学生が学校に通い続ける理由を複数持っていた。

松岡・矢野・石川（2004）は、児童生徒1341名を対象に登校動機を調査した結果、彼らが将来を重視した項目を重視していることを明らかにしている。また、加藤・桂川・菅野（2008）では、中学生を対象に登校行動持続要因の調査を行った結果、「進学／成績」「好きな教科がある」「両親への配慮（心配をかけたくないなど）」「仲間や友人」などが頻出語として示されている。教示文や調査方法の違いから単純に比較はできないが、こうした結果からは、児童生徒のみならず、大学生においても、好きな（興味のある）ことが学べたり将来のために役に立つという実感があること、あるいは仲間や友人がいるといった要素は、登校し続けるための強い後押しとなるといえよう。

他方、大学生にしか見られない「登校行動持続要因」も得られた。たとえば、「誰かのため（感謝・恩返し）」、「金銭」、「自分探し」などの理由は大学生にのみみられた項目であり、大学生の登校を支える特徴的な要因だといえる。大学生という時期は青年期の中盤から後半にあたり、自分の適性や能力、特性を、過去・現在・未来にわたって検討し、自分というものを把握するために試行錯誤を繰り返すことが可能となる。したがって、これまでの人間関係を振り返ったり、これからの自分のことを検討することができ、「誰かのため（感謝・恩返し）」「自分探し」といった理由が大学生になって初めて現れたのだと考えられる。なお、本研究で対象にした大学は2校とも私立大学であった。そのため、国公立大学よりも学費が高く、大学に通うために多額の費用をかけていると考える学生が多い可能性がある。したがって、「金銭」に関しては今後さらに対象を増やすなどして検討を重ねる必要があるだろう。

ところで、「学校に通い続ける理由」には、積極的で意欲的な理由（知識の吸収や人間関係の拡張、自らのためなど）と消極的で葛藤的な理由（友人関係が希薄化することへの不安感や罪悪感、世間体など）があることが明らかとなった。菅野（2008）は、子どもが登校する理由として、①登校規範が身に付いていること、②プラスの学校体験をしていること、③心のエネルギーがあること、④社会的能力が身に付いていることをあげ、登校をするためには特に①、③、④が重要であると述べている。学校という場所は楽しいことばかりがおこる場所ではない。仲間や教員とのトラブル、成績不振など、ストレスを感じる出来事が起こることもあるだろう。しかし、そのような出来事があってもなお学校に通い続けることができるのは、彼らが「仲間外れになりたくない」「恥ずかしい思いをしたくない」といったマイナスの要素をプラスに転じることができたからだと考えられる。古市（1991, 1998）は、学校生活におけるストレスと登校忌避感情に関連があることを指摘したが、ストレスをマイナス要素として増幅させてしまうか、プラスに転じることができるかによって、その後の登校行動は大きく異なる。大学生において消極的で葛藤的な理由が得られたということは、少なからず彼らがマイナスの要素をプラスに転じ、なんとか踏ん張りながら学校へと通い続けている姿だとも推測できる。なお、消極的で葛藤的な理由であっても、学生が登校し続けることができる理由としては、「学校に通い続ける理由」を複数持っていることが考えられる。成分1と2を軸にそれぞれのクラスターおよび構成要素を配置した布置図をみると、クラスター間の距離が近く、いくつかの重なりがみられた。すなわち、1つの理由ではなく複数の理由が学生の登校行動を支えており、学生は各要素のバランスを取りながら登校行動を維持しているといえるだろう。

「登校行動持続要因」と学年・性別・所属大学の関連 さらに本研究では、大学生の「登校行動持続要因」の構造をより詳細に検討するため、学年、性別、学校と登校行動持続要因にどのような関連がみられるかを検討した。

まず、学年の関連を検討したところ、学年が上がるほど「手段×ポジティブ」よりも「情緒×ネガティブ」な理由を示す象限に近い場所に配置されていた。また、性別との関連では、男性が「手段×ネガティブ」な理由を表す位置に、女性は「情緒×ややポジティブ」な理由を示す象限に近い場所に配置されていた。桂川・加藤・菅野（2008）が、中学生を対象に「登校を続けている理由」を複数回答で選択させた調査では、理由選択に性差がみられ、女子は対人・能動的を選択し、男子は環境・受動的的理由を選択する傾向があったことが指摘されている。つ

まり、登校行動持続要因には性差が見られ、女性は対人関係や情緒的な要素を重視したポジティブな理由を、男性は環境や手段的な要素を重視したネガティブな理由を取り上げやすいといえるだろう。

さらに、「登校行動持続要因」と所属大学との関連では、A大学が「視野の拡張」「就職のため」「自分探し」などに代表される「手段的な理由」方向に、B大学が「恩師のサポート」「がんばっている人の影響」などに代表される「情緒的な理由」方向に布置されていた。「ポジティブ—ネガティブ」ではなく、「手段的—情緒的」を表す軸を中心に差がみられたというこの結果からは、「登校行動持続要因」は大学の特性や将来への見通し、周囲との関係によっても差が生じる可能性が示唆されたといえよう。なお、A大学とB大学の女性のみを取り上げ、布置を比較したところ、A大学では1～3年生が第1、第4象限に、4年生が第2象限に配置されていたのに対し、B大学の女性は第2、第3象限に配置されていた。

以上のことから、登校行動の維持には、学年や性別、所属する大学が関連しており、何らかの支援策を講じようとする場合には、学校の特色を踏まえ、性別・学年ごとに対策をとる必要があるといえるだろう。たとえば、A大学や低学年にみられた第1象限と第4象限は、「視野の拡張」「自己成長」「自分探し」などがキーワードで、いろいろなものを吸収しながら自分を探そうとする一方で、今を楽しみたいというモラトリアム気分を持っているといえる。そのため、可能性にチャレンジできる環境をつくと同時に、可能性の限界に出会った時のために現実との折り合いのつけ方を学ぶような支援が必要であろう。また、主に上位学年にみられた第2象限やB大学や女性に多くみられた第3象限は、「親に迷惑をかけたくない」「夢実現のため」「目標達成のため」「周囲のサポート」などがキーワードとなっており、資格取得や目標達成のため、あるいは周囲の期待に応えるためという責任感や義務感から頑張っているといえる。しかし、彼らの大学に通う理由は決して積極的なものばかりではない。そこで、目標達成への支援や努力が認められる環境作り、周囲のサポート力の向上のほかに、目標喪失や息切れした時のために柔軟な思考の獲得を図ったり、肩の力を抜くことができる居場所づくりが必要だといえるだろう。

まとめと今後の課題

大学全入時代を迎え、学生の質は多様化し、対応の難しい学生が増加している。学力や意欲の低下、対人関係の未熟さ、希薄さなどといった特徴とともに、不登校やひきこもり、進路をなかなか決定することができないという現象も目立っている。しかし、大学は社会に出る前の最後の教育機関であり、社会に出る前に長期間にわたって不応状態に陥ることは「学校から社会へ」のスムーズな移行を困難にする可能性がある。これからの社会をつくる一翼を担う学生たちが、いかに最後の学校生活を送り社会に出て行くかは、大学の学生支援のあり方にかかっているといても過言ではない。学校に通い続けるための支援が大学に適応するためだけ支援にとどまらず、学生の社会への移行を支援ことにつながるためにも、今後、さらなる検討を重ね、得られた登校行動持続要因をもとに大学の個性・特色に合わせた学生支援策を探っていきたいと考えている。

なお、本研究では、大学生の「学校に通い続ける理由」をテキストマイニングという手法を

用いて探索的に抽出し、その構造を検討したが、いくつかの課題も残った。

まず1つめとして、調査対象の偏りが考えられる。本研究では、「登校行動持続要因」として閾値6以上の構成要素を対象に分析を行った。しかし、本研究で取り上げられなかった構成要素が、調査対象を変更することで分析対象となることも考えられる。この点は、テキストマイニングによる検討の際には必ず考慮すべき点であり (e.g., 藤井, 2003; 小川・斉藤, 2006), 今後はより広い範囲の対象者を考慮して今回取り上げることでできなかった「登校行動持続要因」についても検討していく必要があるだろう。

次に、本研究では「大学に通い続けられる理由」については検討したが、「登校行動持続要因」と実際の登校行動(出席率)との詳細な関連については検討していない。登校行動持続要因の量の多さが実際の登校行動に影響するのか、登校行動に密接に関連する鍵になるような登校行動持続要因があるのかなどが、今後の検討課題としてあげられよう。

最後に、本研究では「登校行動持続要因」に注目したが、この要因は「登校動機」や「登校忌避感情」とも密接に関連していると考えられる。より実効性の高い支援策を打ち出すためにも、個人内でそれらの要素がどのように統合・分化するのか、どのような形成・維持プロセスがあるのかなどを明らかにする必要があるだろう。今後は登校行動がどのように維持されるのかといった過程を明らかにしていくことによって、大学生の学校適応をより詳細に検討していくことが重要であると思われる。

引用文献

- 藤井美和 (2003). 大学生の持つ「死」イメージ: テキストマイニングによる分析. 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.
- 福田真也 (2000). 大学生の引きこもりと心身症 (大学生のメンタルヘルスと心身症). 心身医学, 40 (3), 199-205.
- 古市裕一 (1991). 小中学校の学校ざらい感情とその規定要因. カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 古市裕一 (1998). 小学生の学校嫌い感情と教師の指導態度—ストレス理論からの検討—. 岡山大学教育学部研究集録, 106, 159-167.
- 半澤礼之 (2004). 大学生の学業に対するリアリティショックと学業・授業意欲低下の関連—Locus of controlの高低に応じた関連の違いの検討—. 共愛学園前橋国際大学論集, (9), 27-37.
- 加藤 陽子・桂川泰典・菅野純 (2008). 「精神的充足・社会的適応力」評価尺度 (KJQ) と登校行動持続要因の関連 (1). 日本教育心理学会総会発表論文集 (50), 36.
- 桂川泰典・加藤 陽子・菅野 純 (2008). 「精神的充足・社会的適応力」評価尺度 (KJQ) と登校行動持続要因の関連 (2). 日本教育心理学会総会発表論文集 (50), 37.
- 菅野純 (2008). 不登校 予防と支援 Q&A70. 明治図書.
- 松岡洋一・矢野弘・石川亜希子 (2004). 登校動機における児童生徒と小学校教師の認識の相違について. 岡山大学教育学部研究収録, 125, 81-87.
- 南博文・山口修 (1991). 大学生生活への移行. 山本多喜司・S.ワップナー (編) 人生移行の発達心理学. 北大路書房, 179-204.
- 文部科学省 (2009). 学校基本調査報告書. 日経印刷.

- 日本学生支援機構学生相談部 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」— (要旨). 大学と学生, (44), 47-54.
- 日本学生相談学会特別委員会 (2007). 2006年度学生相談機関に関する調査報告. 学生相談研究, 27, 238-273.
- 及川恵・坂本真士 (2008). 大学生の精神的不適応に対する予防的アプローチ—授業の場を活用した抑うつ的一次予防プログラムの改訂と効果の検討—. 京都大学高等教育研究, 14, 145-156.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 (2007). 大学退学者におけるUPI得点の特徴. 学生相談研究, 28 (2), 134-142.
- 小川一美・斉藤和志 (2006). テキストマイニングによる中学生の自由記述データの探索的分析—個人特性および人口学的変数との関連から—. 愛知淑徳大学論集—コミュニケーション学部篇—, 6, 83-93.
- 大島啓利・林昭仁・三川孝子・峰松修・塚田展子 (2004). 2003年度学生相談機関に関する調査報告. 学生相談研究, 24, 269-304.
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究. 教育心理学研究, 43, 145-155.
- 外ノ池 裕美 (2007). 自己臭恐怖症の学生への援助. 学生相談研究, 28 (1), 27-37.
- 白石智子 (2005). 大学生の抑うつ傾向に対する心理的介入の実践研究: 認知療法による抑うつ感軽減・予防プログラムの効果に関する一考察. 教育心理学研究, 53 (2), 252-262.
- 内田千代子 (2008). 大学における休退学, 留年性に関する調査—第28報—. 第29回全国大学メンタルヘルス研究会報告書, 86-108.

付 記

本研究は、平成21年度～22年度科学研究補助金 (若手 (B)) 「大学・短期大学における学校不適応予防アプローチ探究のための実証研究」 (研究代表者: 加藤陽子, 課題番号21730523) の助成を受けて行われた。